

令和 6 年 4 月 12 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01075

研究課題名（和文）農耕文化の波及に際する伝統文化の保持についての考古学的研究

研究課題名（英文）Archaeological Study of Continuous Traditionally against Agricultural Culture

研究代表者

宮里 修（MIYAZATO, Osamu）

高知大学・教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門・准教授

研究者番号：60339645

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：（1）発掘調査による集落空間の解明、（2）未報告資料の資料化による関連資料の充実化、（3）東日本系資料の系譜解明、という3つの課題を掲げて課題に取り組んだ。

（1）については4次にわたる発掘調査の結果、埋没丘陵の延長を発見し、小刻みに小さな谷がはいる複雑な旧地形を確認した。あわせて弥生前期の遺物を含む包含層を発見し、遺跡における活動行きの広がりを確認することができた。（2）については居徳遺跡4D区、倉岡遺跡の実測・製図を進め報告書に一定数の資料を掲載することができた。（3）については在地の深鉢・磨研鉢について時間軸となる編年を確立し、土偶と異系統土器の系譜について有力な見解を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

重要遺跡である居徳遺跡について、空間的なひろがりを検討するための資料を加えることができた。低地型貯蔵穴が発見が予想される地形・土層が確認されたことで、一帯の調査を今後どのように進めるべきかについて指針が得られた。資料化においては縄文後期土器に新たな資料を多く加えることができ、ある程度の充実化を図ることができた。また標式資料でありながら実態が不明であった倉岡遺跡出土土器についても概要を示すことができた。研究については、年代の基本軸を整備でき、これにより他地域では確認できなかった縄文伝統の遺存を明確に辿ることができた。土偶と異系統土器については東北・北陸・山陰・東海との関連を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：I designed three research assignments in my research. First one is excavation for Itoku site. In four times excavations, I revealed buried natural features and hidden area of activity in Itoku site. Second one is to make a report of potteries of Itoku and Kuraoka site. There were a lot of figures of that potteries in the research report. In third one, I published four articles as to Jomon-Yayoi transition.

研究分野：考古学

キーワード：縄文・弥生移行期 居徳遺跡 異系統土器 土偶

## 様式 C-19、F-19-1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

南四国には、弥生時代の始まりの二相として注目される田村遺跡と居徳遺跡があるが、このうち居徳遺跡に拠って示された様相は、縄文文化の伝統を主体とした新時代への対応であり、さらに居徳遺跡に保持された縄文文化の伝統が弥生中期に発現した南四国特有の文化の水源となることを展望されていた。大洞式土器や大型石棒など弥生文化成立期になって逆に顕在化する縄文文化については新たな研究主題として定着しており居徳遺跡出土の大洞式土器、木胎漆器、石棒などはその脈絡でしばしば言及される。弥生文化の東漸に対峙するように西漸する東日本系の縄文文化を「縄文の壁」とも喩えらえるが、居徳遺跡を始めとする南四国の縄文時代晩期は縄文文化を主体とした弥生化を考えるための格好の資料群である。

居徳遺跡が全国的に注目を集めたのは、縄文・弥生移行期の東日本系遺物が数多くまた多様に出土したことによる。大洞 A 式の特殊壺、土偶、木胎漆器などは縄文文化終末期の資料群として最古の弥生文化・田村遺跡と対比的に捉えられ、弥生開始期における縄文文化伝統の遺存(抵抗)を象徴的にしめす遺跡としてさらなる検討が求められる。本課題では地域史の観点から諸課題に取り組む考えであるが、居徳遺跡にまつわる論点には①東日本系土器、②土偶、③木胎彩色漆器、④木製鋏、⑤殺傷人骨などがある。これら問題について発掘調査をくわえた考古学的研究からアプローチするのが本課題の取り組みである。

### 2. 研究の目的

本研究は、狩猟・採集生活から農耕生活への移行期(縄文時代から弥生時代への移行期)にあつて「伝統の保持」という対応をはかった一地域の事例(土佐市居徳遺跡)のもつ「歴史性」の解明を目的とした。居徳遺跡を特徴づける考古資料は「東日本系土器」「大型土偶」「木胎彩色漆器」「木製鋏」「受傷人骨」が著名であるが、これを歴史研究の課題に変換すると「なぜ弥生文化の波及に呼応するように縄文文化伝統が及んでくるのか」「居徳遺跡はどのように経由地・居留地となったのか」「居徳遺跡にはどのような社会・文化が形成されたのか」「縄文文化伝統の保持は構成にどう影響したのか」「縄文文化伝統の保持は後世にどう影響したのか」となる。これらの問いに回答をあたえることを本研究の目的とした。

### 3. 研究の方法

研究の実施にあたっては、具体的に3つの課題を設定した。(1)集落の空間構成を解明する、(2)関連資料を充実化する、(3)東日本系資料の系譜を明らかにする、の3課題である。

(1)については、居徳遺跡の発掘調査を実施することとした。既往の発掘調査で確認されたのは埋没丘陵の先端付近とその間の谷部であり、集落域においては縁辺の廃棄場であると考えられる。居徳遺跡は遠方からの移動者が目的地に据えた集落であり、相当規模の構成をとっていたと考えられる。遺跡の理解には、発掘調査を進め遺跡の範囲と空間構成を把握する必要がある。発掘調査では現在の地表からは確認できない埋没丘陵や谷の位置関係の把握を課題とし、地勢の確認につづいては丘陵部を対象として遺構の探索をおこない、居住域の発見を目指すこととした。

(2)については、居徳遺跡のなかで特殊区域とみられる、土偶や受傷人骨が出土した4D

区の出土資料に対して、未報告資料の資料化を進めることとした。2015年度以来、先行して実施してきた整理作業の継続であり、すでに抽出を終えた縄文後期土器、刻目突帯文土器について整理作業を進め、資料化をおこなうこととした。関連遺跡である倉岡遺跡出土資料についても2017年度以来継続している整理作業を進め、資料化をおこなうこととした。

(3) については、居徳遺跡から出土した土偶、東日本系土器の系譜を対象とした。土偶は東北―北陸系の大型土偶、近畿系の台式土偶、土器は大洞式の特殊壺、北陸系の浅鉢・蓋、その他不詳の土器群である。検討の対象となる地域は東北（青森・宮城・福島）、北陸（石川・福井）、近畿（滋賀・奈良）、および山陰である。まずこれらの地域の関連資料を集成し、居徳遺跡出土の関連資料についてはレプリカの作成をおこない、集成資料にもとづいて、順次資料調査を実施し、課題に取り組むこととした。

#### 4. 研究成果

##### [発掘調査]

当初は縄文・弥生移行期の遺物が集中して出土した既調査の1区に対応する居住域の探索を意図したが、複雑に延びる埋没丘陵の位置を正確に把握することと包含層の検出へと目的をシフトさせた。目的の変更には丘陵上面の削平が推測されることや他区域の調査にかかる交渉が難航したことなども背景にある。第1次から第5次にかけての調査により、丘陵1の北側延長となる埋没丘陵の付け根には播鉢状にくぼむ既調査の4区にも似た深い谷があること、丘陵1につながる埋没丘陵はおよそ道路の東縁辺に沿うように延びると考えられるが、樹枝状に分岐する部分があり小さな谷が生じていることなどを確認した。T1付近の谷は深さ2mを遥かに越えると予想され、T3・T4の斜面部、T5・T6の斜面は分厚い瓦礫層と湧水によって掘削が困難であるなど、調査範囲は限定的なものとなった。T2～T6では埋没丘陵の斜面から底部にかけて黒色粘質土層のK層を確認し、古墳時代を中心とする包含層であることを確認した。T2・T3・T5では古墳時代と考えられるピットを検出しており、何らかの土地利用にかかる痕跡が認められた。T4・T6ではK層上面において、旧地表面に該当する不整合面を検出し、土器が集中的に出土する箇所も認められた。今後、調査の条件を整えばヒビノキ式期や古墳時代中期の遺構を検出することも可能であろう。調査の主目的であった縄文・弥生移行期については、掘削深度が十分でなかったため明確な包含層を検出するに至らなかった。ただしT6を中心に弥生時代前期・遠賀川式とみられる壺形土器の破片が一定数出土しており、既調査の1区層序と同様に、縄文・弥生移行期層の上端の一部が検出されたのではないかと考えられる。調査範囲をさらに広げ、深く掘削できれば既調査1F区のように低地型貯蔵穴が検出される可能性がある。出土した遠賀川式の壺は、頸胴境界が段と沈線の間のような様相で、異系統土器が多くもたらされた第8段階に遡上すると考えられる。田村遺跡との関係を示唆する資料はこれまでも発見されているが、このたびの調査においても白色胎土の土器は田村遺跡との関係が考慮されるものである。居徳遺跡の本体である縄文系統の同時期資料を発見することができれば、居徳遺跡をめぐる様々な歴史的状況が一層明らかとなるであろう。しかし肝心の居住域は依然として手掛かりが乏しい。丘陵1側では現在の住宅地が候補となるであろうが調査は困難である。丘陵2では道路際の平坦部に可能性を感じるが、付近一帯は低地部の埋め立てに丘陵の土を切り崩したようであり、広い範囲に削平が及んだものとみられる。居徳遺跡は包含層の深度も深く、偶然の発見がなかなか期待できないため、高知県の歴史を知るための重要遺跡として今後さらなる組織的な調査を期すべき遺跡である。

## [資料化作業]

居徳遺跡 4D 区の調査成果は高知県埋蔵文化財センターにより『居徳遺跡群VI』(2004 年)として報告されている。縄文・弥生移行期の資料が多く出土した 1 区に対して、4 区は縄文後期土器や倉岡型や古段階の刻目突帯文土器など第 4・5 段階(第 IV 章成果論文を参照)の資料が多い。播鉢状の窪地である 4 区のなかでもテラス状の窪地をなす 4D 区には黒色粘質土の包含層中に多量の土器をはじめ、シカ・イノシシを中心とする動物骨、受傷人骨、土偶など特徴的な遺物を含まれており、さらの古墳時代層からは多量の須恵器の他に、碧玉製の勾玉や子持勾玉、鏡形土製品や土製勾玉など祭祀関連遺物が出土している。4D 区が、時代を超えて、特別な廃棄場と位置づけられていたことを窺わせる状況であり、居徳遺跡への理解を深める上で特に重要な箇所であると認められる。居徳遺跡の出土資料を再検討するなかで、4D 区には報告書に掲載されたもの以外にもさらなる資料化を必要とする出土品が数多くあることを知った。また居徳遺跡出土資料の検討を進めるなかで、居徳遺跡にほど近い、縄文晩期中葉の標式遺跡である倉岡遺跡出土資料が未報告のまま保管されていることを併せて知り得た。居徳遺跡 4D 区および倉岡遺跡出土品を資料化し検討しうる材料とすることが高知県における縄文時代研究および縄文・弥生移行期研究において極めて重要な課題であるとの認識をもった。

居徳遺跡 4D 区出土品に対する具体的な取組みは、本研究課題に先立つ 2015 年度より着手している。2015 年度には整理作業を必要とする土器を中心とする資料が整理箱 611 個分あることを把握し、まず収納箱のラベリングと内容確認をおこなった。2016 年度には資料化を必要とする土器の選別をおこない、899 点の土器を抽出した。抽出遺物に対しては時期・器種の分類をおこなった。時期別の内訳は縄文時代 460 点、弥生時代 15 点、古墳時代 424 点であった。主たる整理作業の対象とした縄文土器の内容を詳細に記すと、縄文後期 267 点、後晩期 4 点、晩期 189 点で、器種別では後期が深鉢 244・鉢 18・浅鉢 2・注口 3、後晩期は浅鉢 4、晩期は深鉢 67・鉢 10 で、その他多数の器種不明品がある。2017・2018 年度には接合・注記を実施した。注記は新たに設定した、整理用の通し番号を記した。抽出した縄文土器のうち後期土器をまず図化作業の対象とし、237 点を実測対象遺物とした。本課題の開始となる 2019 年度には、実測対象の縄文後期土器を分類し、暫定的に口胴縄文系 55 点、松ノ木式 21 点、平城式 27 点、縁帯文土器口縁 30 点、鐘崎式 18 点、片粕式 32 点、平行磨消縄文 54 点と把握した。また IV 層の収納箱のなかから刻目突帯文土器および磨研土器の抽出作業を進めた。2020 年度はコロナ禍の影響で室内整理作業は著しく遅延し、一部の資料について実測及び拓本を進めた。2021 年度もコロナ禍の影響で作業が停滞し一部資料について実測を進めた。2022・23 年度はコロナ禍の状況がやや改善したこともあり、集中的に実測作業を進めたが、製図にまで至り本書で報告できたのは僅か 43 点にとどまった。

倉岡遺跡出土資料に対する取組は 2017 年度より開始した。2017 年度にはまず保管状況の記録をおこない台帳を作成した。土器の点数が 4650 点にのぼることを確認した。2018～2019 年度にかけて新たに設定した整理番号にもとづき注記を進めた。本課題の開始となる 2019 年度には注記をおえた資料について、接合を進めつつ分類をおこなった。結果、倉岡遺跡出土土器は、縄文晩期浅鉢が収納箱 1 箱分、縄文晩期深鉢が収納箱 2 箱分、弥生時代南四国型土器が収納箱 1 箱分、ヒビノキ式土器が収納箱 4 箱分と把握できた。縄文晩期土器についてはさらに細かな分類をおこない、倉岡 1 式深鉢(倉岡型) 1,290 点、磨研浅鉢(1～4 段階) 215 点、刻目突帯文土器 15 点、磨研浅鉢(5 段階) 25 点と把握した。コロナ禍

の遅滞を経て、2022年度から口縁資料を中心に実測を進め、70点近くを図化した。期間中にトレースにいたらず実測図の掲載はわずか1点にとどまった。倉岡遺跡出土土器のうち型式分類に適した口縁部資料は120点余りとなるが、内訳は倉岡型98点、先倉岡型1点、刻目凸帯文12点、谷尻式4点、前池式1点、その他7点となる。縄文晩期中葉の標準型式を倉岡1式から倉岡型と改めたが（成果論文①）、倉岡型の特徴とされる口唇部の形態とみると、無刻みは44点、刻目をもつものは54点であった。刻目の種類はD形14点、V形11点、O形6点、貝殻腹縁4点、棒状9点で他に細い刻み、指頭、竹管などがみられた。器面調整には二枚貝条痕20、ナデ16、繊維状擦痕17が認められた。

〔論文〕

2021年度には、コロナ禍の状況をみながら進めた資料調査の成果をまとめ、深鉢と磨研鉢のそれぞれについて分類・編年を主題とする論考を発表し、今後の関連研究のための時間軸と地域間関係を考えるための基礎を整えた。

2022年度は、近畿・東海・四国において資料調査を積み重ね、深鉢および磨研鉢の時間軸にもとづき、居徳遺跡を中心とする南四国出土土偶の系譜についての論考を発表し、東北・北陸・近畿との関係及び各資料の時期を明らかとした。

2023年度は、東北・北信越・東海・山陰・近畿での資料調査をおこない、居徳遺跡出土異系統土器について論考を発表し、限定された時期幅のなかで各地の土器が変容を被りつつ南四国にいたった状況を明らかとした。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 宮里修	4. 巻 60
2. 論文標題 南四国縄文晩期磨研鉢の分類と編年	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 海南史学	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮里修	4. 巻 7
2. 論文標題 南四国出土土偶の系譜	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 高知考古学研究	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮里修	4. 巻 6
2. 論文標題 南四国縄文晩期深鉢の型式分類と組列	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 高知考古学研究	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮里修	4. 巻 8
2. 論文標題 縄文・弥生移行期の南四国における異系統土器の系譜について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 高知考古学研究	6. 最初と最後の頁 13-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------